国語（その一）

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

問題文は、著作権者の許可が得られた後に掲載します

国語　（その二）

問題文は、著作権者の許可が得られた後に掲載します

国語（その三）

問題文は、著作権者の許可が得られた後に掲載します

（汐見稔幸（しおみとしゆき）『教えから学びへ　教育にとって一番大切なこと』による）

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部A「実際にはなかなか削減が進みません」とあるが、それはなぜか。五十字以内（句読点なども字数に含む）で説明しなさい。

問二　傍線部B「世界で次々に起こる問題を解決できないのはなぜか」とあるが、解決するためにはどのようなことが求められるのか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

国語（その四）

問三 傍線部**C**「ある前提的な枠組みや色眼鏡でものを見ています」とあるが、このように見るのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 前提的な枠組みや色眼鏡を通してものを見ることによって、はじめて正しく世界を捉えることができるから。

② 前提的な枠組みや色眼鏡を通してものを見ることによって、かえって世の中の問題点が浮き彫りにできるから。

③ 前提的な枠組みや色眼鏡を通してものを見なければ、目の前に広がっている世界は混沌（こんとん）としたままであるから。

④ 前提的な枠組みや色眼鏡を通してものを見ることによって、どうにか思考の仕方を変えることできるから。

⑤ 前提的な枠組みや色眼鏡を通してものを見ていると、何が思い込みで何が偏見なのかが分かってくるから。

問四 傍線部**D**「一つのものの考え方」とあるが、ある時代の人々のものの見方や考え方を規定する概念的な枠組みのことを何というのか。カタカナ語で書きなさい。

問五 **X** に入る、次の**ア**～**エ**の四つの文の正しい並べ方として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア つまり、「がん細胞を見つけたい」という「眼鏡」を持っていないと、がん細胞は見つかりません。

イ ハンソンは、「あなたがなんとなく顕微鏡を見たとき、どこにがん細胞があるかわかりますか」と問いました。

ウ 「ここにがん細胞があるはずだ」「もしあるとしたらこういう形ではないか」という仮説をもってアタリをつけながら顕微鏡を見るからこそ、「あ、これかな」と見つけることができるのです。

エ きっとこの本を読んでいるみなさんの多くも、そして私も、何も聞かされずに顕微鏡をのぞいたときにはがん細胞を見つけることができないと思います。

① **イ→ア→エ→ウ**　② **イ→ウ→エ→ア**　③ **イ→エ→ウ→ア**
④ **ウ→ア→イ→エ**　⑤ **ウ→イ→エ→ア**

国語（その五）

問六 傍線部E「これからの時代」とあるが、それはどのような時代なのか。本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 世界を数理で分けて説明する科学的な考え方を払拭し、独創的な考え方を一からつくる必要がある。

② 日本の学校教育は、不確実で複雑な世の中を生きていくために、企業の論理を学ばなくてはならない。

③ 自然ではなく社会や人間を研究の対象とする場合には、思い込みや偏見をなくすことが求められる。

④ 対症療法的な解決方法ではなく、根本的な解決を目指して、思考の枠組みを検討しなくてはならない。

⑤ 生産力を上げることではなく、自然の中で生き物と共に生活することが人間にとっての幸せである。

国語（その六）

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

他者の生活史の理解を通じて、他者がいかなる中核的感情欲求をどのように満たされたか、満たされていないか、を把握していくプロセスは、「他者の他者性」に気づくことであり、それを通じて「己の唯一無二性」を捉え直すことでもあります。

「他者の他者性」とは「他者には、自分には理解し得ない他者性がある」ということです。これは、生きる苦悩を抱えた急性期の精神障害者に、薬物投与①イッペントウではなく対話を繰り返すことにより、遥かによい「治療効果」をもたらしている(注1)オープンダイアローグというアプローチで主張されている考え方です（セイックラ&アーンキル『開かれた対話と未来』）。

私はこのオープンダイアローグの集中研修を二〇一七年に受け、文字通り世界観が変わりはじめました。「他者の他者性」という考え方を知ることにより、A「意見をまとめなければならない」という私自身の強迫観念から自由になることができたのです。それは一体どういうことでしょうか？

私は娘や妻のことを完全に理解することはできません。なぜなら、私は妻や娘になれないし、娘や妻には私に理解し得ない他者性があるからです。ということは、私が妻や娘と対話をしても、完璧に理解し合えるわけではありません。妻と結婚して二〇年が経ち、割と毎日のように会話をしていますが、それでも「そうだったの？　知らなかった！」と思う出来事に未だに出会います。つまり、自分には想像も理解もし得ない他者性が、他者には含まれているのです。

ということは、他者と意見を完璧に一致させることは、原理的に無理なことだと言えます。だから、「意見をまとめる」というのは、一方が他方を説得し、相手に服従するあるいは鵜呑みにする中で、「まあええか」「もうしゃあないか」という妥協の産物として導かれる可能性も少なくありません。それは、時には暴力的になります。「B長いものには巻かれろ」とか「言っても仕方ない」という諦めがベースになる場合だってあります。

では、c物事を決める時にどうすればよいのか？　私がオープンダイアローグの提唱者の一人、トム・アーンキルさんから直接学んだのは、「違いを知る対話」と「決定のための対話」を分けるやり方です。彼が勤めていた研究所で方針決定などをする際、午前中はそのテーマについてのお互いの思いをざっくばらんに話し合う「違いを知る対話」に時間をかける、といいます。それをお互いが理解した上で、「ではどうしたらよいか？」という「決定のための対話」は、お昼ご飯を挟んで午後に行うと、上手く決まりやすいと言います。【I】

学級会であれ会社の会議であれ、話が揉めるのは、価値観が対立した際です。一つの

国語（その七）

テーマに関して、お互いが違う意見や見解を持っていて、双方の正しさに一定の理（ことわり）がありなかなかまとまらないとき、話が揉めるのです。それを司会者や(注2)ファシリテーターが力ずくで一つにまとめようとすると、違う見解を持っている人は反発したり、黙り込んだりします。なぜなら、自分の意見が聞かれていない、尊重されていないと思うからです。【Ⅱ】

でも、その前に、お互いの価値前提を聞き合う時間があれば、話は違ってきます。なぜあの人は私と反対の意見を持っているのか。そこには必ず理由や背景があります。「そんなのあり得ない！」と思う意見であっても、なぜそう考えるのか、という他者の合理性（＝出来事と選択と理由の、連鎖と②チクセキ）をしっかり聞いているうちに、自分が相手の③キョウグウに置かれたら、そう考えるかもしれないな、と理解ができてくるのです。【Ⅲ】

この他者の他者性に気づいた（「違いを知る対話」をした）後で、「ではどうするか？」という「決定のための対話」を行うと、決定の質が異なってきます。自分が正しいと信じる価値観の押しつけではなく、相手の価値観も受け入れた上で、でもこうも言えませんか？と提案することになります。相手の側も、自分の価値前提をちゃんと聞いて理解してもらった上で、異なる提案をされると、すんなり受け入れやすくなったりするのです。【Ⅳ】

これが、共に思い合う関係性の基盤にあると私は考えます。【Ⅴ】

他者には自分に知り得ない他者性があることに気づくプロセスは、自分自身にも、その他者とは違う圧倒的な固有性があることに気づくプロセスでもあります。それは、D「己の唯一無二性」と出会い直すことでもあります。これは他者とケア関係を結ぶときに、ギフトとしてもたらされるものかもしれません。

娘をケアしはじめた時、思い通りにならず、圧倒的に時間と手間がかかる娘を前に、あたふたオロオロ、そして時にはイライラしていました。でも、そんな娘に関わるうちに、娘を通じて自分自身を見つめ直す瞬間が沢山訪れます。それは、私自身の中核的感情欲求のどの部分が満たされていないか、と向き合うことであり、どのような部分に非寛容なのかを知ることでもありました。ある種の自分自身の「影」との出会いでもあります。

でも、見たくない自分自身の影をなかったことにする、あるいは他人に投影してバッシングしても、その影の亡霊に襲われるばかりです。強みもあれば弱みもある。得意と不得意はセットです。その際、弱みや不得意をなかったことにするのは、自分自身の実像の半分しか認めていないことになります。

「己の唯一無二性」と出会う（出会い直す）とは、至らなさや愚かさ、④ミニクさも含めた、見たくない影をも、そのものとして認めることを指します。それは、結構キツ

国語（その八）

いプロセスです。娘の言動にカッとなって怒っている時に、「お父さん、怒ってる？」と聞かれると、まさに「影に直接問われている」ような気分になります。私はなかなか変わることができない人間なので、「怒ってへんで！」とE仏頂面で応えたりしてしまいます。

娘をケアする中で、自分自身の影と出会い、その影を否定せずに認めることは、実は娘の他者性をそのものとして認めるという意味で、相互承認のプロセスでもあるのです。娘にイライラする時は、私の中で許せない（注3）スキーマや価値観と出会っている時でもあります。それは、彼女にイライラしているようで、自分の許容しない影をそのものとして突きつけられていることでもあります。一方で、なぜ彼女が私をイライラさせる行為に出たのか、という他者の他者性を理解するプロセスの中で、彼女がそうせざるを得ない出来事と選択と理由の、連鎖とチクセキ（＝他者の合理性）が理解できてきます。すると、彼女を許せるだけでなく、彼女にイライラした自分の内的合理性も理解でき、それをも許せるようになってくるのです。そんな父の様子を見ていると、娘の不安定さもどんどん鎮まっていきます。

（竹端寛『ケアしケアされ、生きていく』による）

（注1）オープンダイアローグ ―― 当事者、家族、当事者を支える人たちが集まり、開かれた対話を行う、精神科医療の新しい方法。
（注2）ファシリテーター ―― 会議などを円滑に進行する人。
（注3）スキーマ ―― 外界を認識するときに使われる知識の枠組み。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「『意見をまとめなければならない』という私自身の強迫観念から自由になることができた」とあるが、それはなぜか。次の空欄に入れるのに最も適切なものを本文中から三十字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］ということが分かったから。

国語（その九）

問三 傍線部B「長いものには巻かれろ」とあるが、これと同様の意味を持つことわざを書きなさい。

問四 傍線部C「物事を決める時にどうすればよいのか？」とあるが、どうすればよいと筆者は考えているのか。次の空欄に入れるのに最も適切なものを本文中から十二字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］をつくればよい。

問五 次の一文を挿入する場所として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

なぜこのような、遠回りに見えるプロセスを踏むのでしょうか。

①【Ⅰ】　②【Ⅱ】　③【Ⅲ】　④【Ⅳ】　⑤【Ⅴ】

問六 傍線部D「『己の唯一無二性』と出会い直す」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 感情的に何に満足していないのかが分かり、それを満たすことによって精神的に安定するようになったということ。

② 他者の他者性に気づくことにもなり、自分は自分、他人は他人とそれぞれでよいと達観するようになったということ。

③ 娘にイライラする理由が解明できたので、娘をいかに変容させれば承認できるのかが分かるようになったということ。

④ 自分の中には至らなさがあるが、それも含めて自分の固有性だと分かり、自分本位に振る舞うようになったということ。

⑤ 自分は何に対して寛容的でないのかを知ることで、自分の中の見たくない一面も認められるようになったということ。

国語（その十）

問七 傍線部E「仏頂面」とあるが、この言葉の辞書的な意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 激怒した顔　② 不機嫌な顔　③ 当惑した顔
④ 怪訝（けげん）な顔　⑤ 悲しげな顔

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 会議においては、意見をまとめる必要はなく、とにかく他者の考えがどのように生まれたのかを理解すればよい。

② 精神障害者を治療するためには、薬物投与ではなく、オープンダイアローグという手法を取らなくてはならない。

③ 「違いを知る対話」よりも「決定のための対話」の方が重要であるので、後者を重点的に行わなくてはならない。

④ 他者をケアすることで、自分の内的合理性が理解できたり、自らの世界観を変えることができたりすることもある。

⑤ 他者と関係を持つ場合には、他者の他者性を理解する前に、まず自分自身を見つめ直すことが求められている。

国語　（その十一）

第三問　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

感情がこころの問題か、からだの問題かを考えるにあたって、東洋医学の感情観察をみていきましょう。私たちと比較的身近な東洋医学では、感情が内臓に密接なつながりがあると考えているようなのです。

感情の変化によって五臓がダメージを受け、不調におちいってしまう。過剰なストレスや無意識に①ガマンして溜めこんだ感情が高まりすぎると、内臓に影響し、血の流れやエネルギーの流れを②ソガイし、病気の原因のひとつになりうる。

東洋医学では感情は、「怒」「喜」「思」「憂」「悲」「恐」「驚」の7つに分けることができ、怒は肝、喜は心、思（思い悩む）は脾（消化器系）、憂と悲は肺、恐と驚は腎といったように、感情と五臓の関係性を「五志」という概念でとらえてきました。これは、私たちが日常的に、からだの一部を使った慣用句を使うことなども、からだと感情の結びつきを想像させます。

日本語教育学者の荻原稚佳子さんによると、日本語では「心臓」を使った慣用句は少なく、「厚かましさ」「ふてぶてしさ」を表わす、「心臓が強い」「心臓に毛が生えた」くらいだといいます。それにたいして「胸」は、「胸が熱くなる」「胸が裂ける」「胸が一杯になる」「胸がすく」など、「情」を表わすときにたとえとして使われている。

また「頭」は、「頭がいい」「頭が切れる」のように知性や脳の働き、「腕」は、「腕が立つ」「腕に覚えがある」「腕が上がる」「甲」など、腕力から転じて、技能や技術を表わすたとえとして使われます。

「腹」は「腹が立つ」「A腹を割って話す」「腹黒い」といったように、多くの慣用句があります。

「腹を割って話す」は英語では“have a heart to heart talk”と表現し、「腹黒い」は“black-hearted”になります。つまり、日本語では「腹」に人間の本心（本音）があり、英語では本心は“heart”、「心臓」にあるとみていることになります。そして、それをさらけだして、正直に話すときは「腹を割る」になり、本心に③ジャマシがある場合は「腹黒い」になる。

英語には、“heart”を使ったB慣用句が多く、“to lose one’s heart”（人と恋に落ちる）、“cold-hearted”（心の冷たい）、“heartbreaking”（胸が張り裂けるような／悲痛な）など“heart”は「本心」だけでなく「心」も表わし、感情や感覚的なものが「心臓」を使ってたとえられているそうです。

感情は腹から湧くのか、感情は心で起こるのか。もしかしたら人種や民族によって感情の発生する場所が違うのか。そんなことまで想像してみてもいいかもしれません。

国語　（その十二）

身体レベルでの感情の起源について、感情は「子宮」で起こると考えていた人びとがいた。そんな興味深い話を、能楽師の安田登（のぼる）さんが『あわいの力――「心の時代」の次を生きる』でしてくれています。

安田さんは人間の「心」の発生について考察していくなかで、古代には「心」の動きは「内臓」の動きと関係があると思われていたようだというのです。

『新約聖書』は「コイネー」と呼ばれる特殊な古典ギリシャ語で書かれているのですが、そのなかに「スプランクニゾマイ」という言葉があって、それを日本語では「憐れみ」と訳されるのだそうです。この言葉は「内臓が動く」というニュアンスをもち、英訳では「compassion」になります。つまり、相手の「感情（passion）」と「一緒（com）」になること、つまり感情の同期ですから、古代の人たちは感情が一体化する感覚を、「内臓」で感じていたようなのです。

「スプランクニゾマイ」のもとになったと思われる「スプランクナ」という言葉は、ホメーロス（紀元前8世紀？）の④ジョジ詩『イーリアス』や『オデュッセイア』で「内臓」、とくに「生け贄（にえ）の内臓」という意味で使われています。またヘブライ語で「憐れみ」を表わす言葉は、複数形なら「ラハミイム」、単数形なら「ラーハム」で、この語には「内臓」、［イ］「子宮」という意味があるといいます。

またアッカド語（ヘブライ語はセム語系という言語の系統に属し、同じセム語系に属する代表的な言語はアラビア語で、最古の言語がアッカド語）で「憐れみ」を意味する言葉は「レム（ム）」、あるいは「リム」で、「子宮」を意味する。また、同じ楔（くさび）形文字を使うシュメール語でも「子宮」を意味する「アルフシュ」という単語が、「憐れみ」「同情すること」という言葉で説明されているそうです。

安田さんによると、シュメール人にはじまり、アッカド語を使うアッシリアの人びと、古代のユダヤ人は、相手の感情と一体化する感覚を「子宮」で感じていたことになります。

［ロ］日本ではどうなのでしょうか。ひきつづき安田さんの考察をたどっていきます。

『古事記』におさめられた仁徳天皇の歌に、「大猪子（おおいこ）が原　大猪子が　腹にある　肝向ふ心をだにか　相思はずあらむ」という一節があります。

この「肝」は現代の肝臓ではなく、内臓全般を指す言葉で、『古事記』の時代の人びとは「心は腹のなかの内臓のうちにある」と思っていたようだ、と安田さんはみます。そして、現代人である私たちには、心が内臓（腹）にあるという感覚は希薄になっているのではないかというのです。

国語（その十三）

腹を使った「c腹が立つ」という言葉が、若い世代になると「頭に来る」といういいかたが普通になっていることも、感情が生まれるところが「子宮」や「内臓」「腹」から、どんどん上にのぼってきていることを表わしているのではないか。

「心」が行きつくところまで上にのぼり、あらゆることを「脳」で考えるようになって、さまざまな問題を引きおこしている。安田さんはだからこそ、人類が「心」に代わるなにかを手にするうえで、現代の人が失いかけている「内臓感覚」を取りもどすことが重要な意味をもつのだといいます。

また私たちは、「腑に落ちる」や「腑に落ちない」という言葉を知っています。感情についても、「納得できない」「合点がいかない」を意味するD「腑に落ちない」感情は、意外と重要なのではないでしょうか。

（畑中章宏『感情の民俗学　泣くことと笑うことの正体を求めて』による）

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　空欄**甲**に入れるのに適切な慣用句を一つ書きなさい。

問三　傍線部**A**「腹を割って話す」とあるが、これと同様の意味をもつものとして適切ではないものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① ぶっちゃけて話す　② 忌憚なく話す　③ 本音で話す
④ 胸襟を開いて話す　⑤ 一顧だにせず話す

問四　傍線部**B**「メタファー」とあるが、これを漢字二字で言い換えなさい。

問五　空欄**イ**、**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

① それでは　② とはいえ　③ つまり　④ むしろ　⑤ あるいは

国語　（その十四）

問六　傍線部C「腹が立つ」とあるが、怒りの感情を表すのに、なぜ腹を用いるのか。次の空欄に入れるのに最も適切なものを本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

腹に［　　］があると考えているから。

問七　傍線部D『腑に落ちない』感情は、意外と重要なのではないでしょうか」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 現代人は「脳」で考えて行動しているが、さまざまな問題を解決するには、感覚的に行動すべきだから。

② 現代人は何事も知性を働かせて捉えようとするが、内臓と感情の結びつきを取りもどす必要があるから。

③ 現代人は「内臓」や「子宮」を蔑（ないがし）ろにしているが、まずからだを整え健康にならなくてはならないから。

④ 現代人は「頭」から感情が生まれてくると考えているが、感情は「心」から生まれてくるものであるから。

⑤ 現代人は他者の感情と一体化することは大切にするが、自分で納得できるかどうかの方が問題であるから。

問八　本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 感情がこころの問題か、からだの問題かに対する考え方は、東洋と西洋とでは大きく異なっている。

② 日本語では「心臓」を使った慣用句は少ないが、それは日本人が厚かましく、ふてぶてしいからである。

③ シュメール人やアッシリアの人々や古代のユダヤ人は、他者の感情と一体化する優しい人が多い。

④ 過剰なストレスが知らないうちに溜まることによって、からだが不調になり、病気になってしまうという考え方もある。

⑤ 『古事記』の時代の人々は、心は腹のなかの内臓にあると、私たちから見ると稚拙な考えを持っていた。